作家 志茂田景樹さん

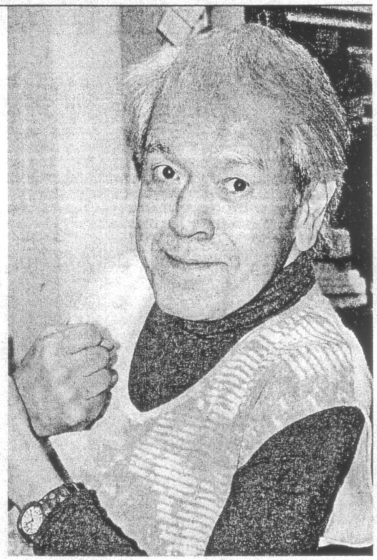
子供に囲まれ読み聞かせ、「0歳」から生き生き。

――全国を回り、ボランティアで絵本や本の読み聞かせ会を開いています。

志茂田さん　もう14年ほどになります。初めてやったのは福岡市内のデパートでした。本当はサイン会をしに行ったんです。100人ほど集まってくれたかな。でも多くは言葉は悪いけど「やじ馬」なんです。本を買ってくれるわけじゃない。僕が、こんな髪を虹色に染めているもんだから珍しいだけ（笑い）。

親に連れられて子ども20人ほどきていたんです。僕は以前から読み聞かせに興味があって、じゃ、試しに読んでみようかと半ば偶発的に始めたんです。書店の人が見つくろって持ってきたのが「三匹のこぶた」と新美南吉の童話「赤いろうそく」でした。

驚いたことに、読み始めて1分もしない間に、あれほどざわついていた会場がシーンと静まり返った。大人も子どもも物語の世界に入り込んでいる。こんなにも等しく胸に響くのかって。終わった後でお礼を言われまして。小学生は「感動しました」なんて言うんですけど、大人も「久々に童心の世界に戻れて気持ちがいい思いをした」と。



しもだ・かげき　1940年、静岡県生まれ。中央大法学部卒。76年「やっとこ探偵」でデビュー。80年「黄色い牙」で直木賞。児童書や絵本の原作なども手がける。日本文芸家クラブ会長。
＝根本撮影

僕は黙ってうなずいていたんですが、ハッと気づいたら僕自身すがすがしい気持ちになっていたんですね。純真なというのか、聞かせてあげたはずの僕も、心が洗われていたんです。読み手と聞き手とが感動を分かち合えるすてきな空間。僕にとってはまさに新発見だったんです。

――最初に読み聞かせに興味を持ったきっかけは？

志茂田さん　幼い頃、母がしてくれたんです。僕を寝かし付けて家事を済ませたかったんでしょうけど、僕は1時間もすると目覚めて泣き出してしまう。母は仕方なく2冊目を読んで、僕が熟睡するのを確認してから台所に立ったと話していました。まあ、母も読みながらリラックスしていたんだと思いますよ。

――主にどんな本ですか。

志茂田さん　アンデルセンが多かったですね。覚えているのは「赤いくつ」。赤い靴を履いていた女の子が両足を切断されるシーンは怖かったんですが、物語全体としては感動的なものでした。

今は、残酷な部分はカットした本も出版されています。良くない傾向ですよ。つらさと楽しさ、悲しみと幸せを共に感じることで幼子は判断力を養っていくんです。純粋培養だと心に痛みを覚えた時への免疫力が育たない。だから衝動的にキレる子が多い。親御さんたちには、残酷な場面も子どもに隠さず読んで聞かせてほしいんです。

――東日本大震災の被災地も訪ねていますね。

志茂田さん　今月も宮城県気仙沼市に行って……印象に残っているのは昨年4月、栃木県小山市を回った時のことでした。福島県からの避難者がいる所なんですが、小学校高学年の男の子が「僕、これからどうなるのかなあ」ってポツンとつぶやいたんです。

新潟県中越地震（04年）や福岡沖玄界地震（05年）でも避難所で、何人かの子どもたちが「僕らどうなるの？」と心配する言葉を発しました。しかし、それは家族と一緒に暮らせるんだろうかとか、学校で友達と遊べるのかのレベルで話していたんですね。

ところが、小山の子どもは意味がまるで違う。5年後、10年後、僕の体や故郷はどうなっているんだろうって心に巣くう強い不安が言わせたんです。大人が「直ちに影響はない」と言いつのっても子どもは簡単には信じません。

津波による被災地の子どもたちはいずれ立ち直り、心をピンと張れると思うんです。子どもは強い。半面、福島から小山に避難していた子どもたちが抱く将来への不安を取り除くのは容易ではないでしょう。でも読み聞かせで心を癒やすことはできる。僕は改めてこの活動を続けていこうと決めたんです。

――逆に、子どもたちから学んだことはありますか。

志茂田さん　うーん、以前ある男の子に「おじちゃん、かわいいって言われたいからそんな頭をしてるの？」って聞かれて、ドキッとしてね。かわいいにはカッコイイとか、おしゃれとかいろんな意味があるけど、その子に言われたことは図星だったんですよ。子どもの観察眼ってすごいんだなあって。

子どもの好奇心、純粋さにはいつも驚かされるんです。特に2、3歳児の目にはカネやモノの豊かさなんて映らない。それで僕は、60歳の誕生日を機に自分の年齢を「新0歳」としてみたんです。還暦を迎えて、今が出発点という意味もあったんですが、0歳になったつもりで物事を見る。すると、景色が違ってきた。ゆっくりと賢くなっていく僕がいる。売れる作品にこだわっていた僕が、改めて小説を生み出す楽しみに出合えたんです。僕の瞳って、幸せ感で生き生きしているでしょ！　大きな夢も持ってたんです。

――どんな夢ですか？

志茂田さん　東京都内の下町か郊外の木立の中あたりに、皆が集える「読み聞かせの館」を建ててみたいんです。それからマイクロバスをカラフルに染めて、全国を回って読み聞かせの旅をする。僕はまだ新11歳。いつか実現させてみたいなあ。

仕事一辺倒だった僕がこんな気持ちになれたのも、読み聞かせのおかげなんですね。すてきな時間、空間を過ごしながら、子どもたちに囲まれて、新しい生き方に気づかせてもらった。とても充実した気分なんです。

【根本太一】